

7. アルコール・ Korsakoff 症候群における Domain-Specific な記憶リハビリテーション (病棟職員の顔写真による氏名の記憶)

—特に職員の所属病棟に関する錯誤の変化について—

若松直樹¹⁾ 吉益晴夫¹⁾ 小山田 聡¹⁾
 佐藤孝子¹⁾ 橋田知子¹⁾ 箕浦重子¹⁾
 三村 将²⁾ 加藤元一郎²⁾ 鹿島晴雄³⁾

アルコール・ Korsakoff 症候群の患者に対して、記憶面でのリハビリテーションを実施した。リハビリテーションの経過の中でみられた現象について報告したい。

【対象】 駒木野病院アルコール専門病棟に入院中の男性 Korsakoff 症候群患者 5 名。平均年齢：53.3 歳。平均教育歴：12.0 年。平均 FIQ (WAIS-R)：91.3 である。全例が断酒後最低半年を経過している。

【方法】 25 枚の顔写真 (20 枚は専門病棟職員、5 枚は他病棟職員) をランダムに一枚ずつ提示し、人物が専門病棟の職員であるか否かの再認課題 [○/×]、及びその氏名想起の再生課題。その後、答あわせを兼ねて写真裏面に書いた氏名を見せ、その人物の特徴を挙げるなどしながら記憶を促した。結果の判定は職員の配属についての正答数、想起できた人物氏名の正答数でおこなった。

【結果】 各ケースとも人物名想起 (再生課題) において再生数は増加した。4 ヶ月ほどの訓練で再生数はほぼプラトーに達した。

また、職員の配属先について (再認課題) は、再生数のプラトーに達した後より正答数が減少し、その誤答反応の内容に変化がみられた。つまり、訓練開始当初は専門病棟の職員に対しこれを [×]

とする False Negative が優勢であり、現在では他病棟の職員に対しこれを [○] とする False Positive が増加する傾向である。

なお、神経心理学的検査の成績にはリハビリテーションの前後で変化はみられなかった。

【考察】 False Positive の増加は、写真を反復して提示されることによる他病棟職員に対する Familiarity の増加によると思われるが、このことから、ある種の目的で行われるリハビリテーションの場合には、長期の訓練の実施はむしろ本来の目的とは逆の結果を導く心配を示唆すると思われる。

訓練に伴う頻回な顔写真の提示による Familiarity の増加、すなわち、implicit な学習がその顔写真の explicit な記憶、いわゆる、Identity Specific Semantic Information の混乱を引き起こしたと考えられる。記憶障害のリハビリテーションにおいて患者に試行錯誤を求める課題の際には、患者のおかす誤りそのものが、患者自身の正答の想起に対して implicit な影響を及ぼす恐れがあることを考慮すべきであることが示唆される。

なお、写真による人物認知の改善は全般的記憶力の改善に汎化しないことが示唆された。

1) 駒木野病院

2) 東京歯科大学市川総合病院精神神経科

3) 慶應義塾大学医学部精神神経科